研究センターニュース第106号

特定非営利活動法人
地域と協同の研究センター

巻頭エッセイ

東日本大震災から２年

栗田　暢之
（特定非営利活動法人　レスキューストックヤード代表理事）

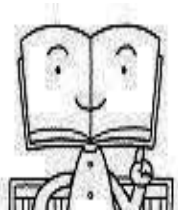
「ボランティアさんがめっきり少なくなってしまって、とっても寂しいんだ。今度はいつ来てくれるの。忘れないでね」。これは足湯を施すボランティアに被災者が語った生の声です。これまで100万人を超えるボランティアが現場を支え、励ましてきたことは事実です。しかし、現在では震災の風化と正比例するかのように、急激に少なくなっています。本当にこのままボランテイアがいなくなっていいものでしょうか。確かに、震災当初の泥かきや炊き出しといったわかりやすい活動がひと段落していることはあります。また活動のために必要な人材や資金の問題はあります。しかし、できる範囲でいいので、息長く応援し続けることが必要だと思うのは、被災者が「まだ困っている」という歴然とした現実があるからです。復興には個人差があり、課題はますます個別化、深刻化、潜在化しています。しかしだからこそ私たちボランティアだからできる目配り・気配り・心配りが必要とされているのです。そして復興のペースの遅い人にあわせられるのも、ボランティアのなせるわざだと考えます。現地で支援活動を継続している地元の社協や生協、ボランティア団体、NPO・NGOは、力を合わせて、現場のこうした声をより具体的に届ける努力をしていただきたいと思います。しょっちゅうでなくても、たまに会うということでも、どれだけ被災者にとっては励みになるかは計り知れません。あの日からまだ2年です。被災者に「忘れないでね」と言わせる前に、決して忘れるわけにはいかない復興途上の段階なのだと考えます。

一方、今回の震災でより困難な状況をつくり出してしまっているのが、原発事故による放射能汚染の問題です。福島県だけでも避難生活を余儀なくされている方が 16 万人。そのうち、警戒区域などから区域外へ避難されるなどの県内避難が 10 万人。そして県外避難が 6 万人と報告されています。さらに「福島県は大変」という言葉に疎外感を抱く方々がいます。それは福島県境の宮城県や栃木県、茨城県、さらにはホットスポットと呼ばれる関東地域から県外へと避難されている方々です。その数すら誰も把握できておらず、避難先の自治体のごく一部や各地のボランテイアや当事者が善意で支援活動を細々と行っているのが現状です。完全に放置されていると言わざるをえません。また警戒区域外からの避難を「自主避難」と呼んでいること自体、あたかも「勝手に避難した」と印象付けてしまっています。本当にそうでしょうか。何年後かに放射能の影響が出ないと本当に言い切れるのでしょうか。つまり、被災者自身が断腸の思いで下した判断や決意はないがしろにされ、国によって決められた「危険か否か」の境界線が、さまざまな分断を引き起こしていまっているのです。それは、「留まる人・避難する人」「帰れる人・帰れない人」「帰りたい人・帰りたくない人」、さらには「賠償金の対象内・対象外」など、様々な分断です。このことは、すべて日本国内でかつ現在進行形で起こっている現実です。決して「福島」だけの特別な問題ではなく、日本全体の問題なのです。原発事故さえなければ、当たり前の日常があった何の落ち度もない方々です。然るべき責任は国や東電にきちんととっていただくこととして、私たちボランティアは、このような分断を一つひとつ丁寧に「つむぐ」役割があるのだと考えます。それは、話をそばで聴くこと、一緒に泣いたり、怒ったり、時には笑ったり、楽しいひと時を創り出したりすることが大切なのだと思います。そして被災者は「私たちのことがまるで何事もなかったかのように忘れ去られるのが怖い」と言われます。ここでも「忘れないで」と訴えられるのです。

（２ｐへ続く）

仙台市内のある仮設住宅。殺伐とした中でも人は懸命に生きている（2013年2月）

改めて東日本大震災から２年という節目を鑑みた時、当然ながら震災はまだ終わっていないこと、そして私たちの最大の敵は「無関心」なのだということがわかります。現地のことを心の中だけでも想い馳せる、可能ならば現地に行く、現地の物を買う、義援金を送る、自分の住むまちに避難されてきた方と交流する、手紙やメールを書く、電話をかける、一緒にボランテイアをするなどして、「一人も絶望する人を出さない」ことが、今、私たちボランテイアにできる最も大切な役割なのだと考えます。私たちは、「困ったときはお互い様」という先人から引き継いだすばらしい文化を持っています。一時の熱い感情で終わらせることなく、息長く応援し続けようではありませんか。



2012　地域福祉を支える市民協同パネルでは・・・

地縁組織、志縁組織、生協の視点から、地域福祉を考える―4回の座談会より

地域福祉を支える市民協同パネル　担当事務局からの報告

このパネルでは、パネルの名称が主体的なテーマになっています。立ち上げから5年間が経過する中で、世話人たちは安心して話し合いや学びができる場を作り上げてきています。2012年度では、「地域福祉を支える市民協同」とは一体どういうことなのか？あらためてこのことを問い直しをして、このパネルとしてこのように考えた、その中身については発信しよう！ということで進めてきました。

（文責　パネル事務局　椋木真佐子）

■課題や実感を持ち寄って

このパネルに集っている世話人は、地域で福祉（高齢者、障がい者、介護・・・というような狭い意味ではなく、まちづくりも含めた広い意味で使っています）に関わっているという自覚や関心を持っています。そこには様々な現場があり、個別の課題をもって集まってきています。そうしたことを大切にしながら会は進行していきますが、まさに当事者の方々の実践、取り組みについて自ら話をし、それをみんなで聞き合い、探究していくというプロセスをていねいに作ってきていて、今年度は座談会スタイルで実施しました。

■座談会を開催して考える

座談会の全体テーマは、地域福祉を支える市民協同の探究とし、広い意味での地域福祉を支えている組織や活動の有り様や関係性を探るために、3つの観点から座談会を開催しました。

①地縁組織（自治会・町内会など）と、②志縁組織（NPOや社会福祉法人、ワーカーズコープなど）、③生協組織の視点でという組み立てです。

●地縁組織の視点から地域福祉を考える

１回目の座談会（６月９日）「地縁組織の視点から地域福祉を考える」では、①「名張ゆめづくり予算制度～地域ビジョン」（三重県名張市で実施：幸松孝太郎さん）、②「小牧市本庄における地域につなぐまちづくり」（小牧市の地域3あい事業：松浦明美さん）、③「住民自治が織りなす豊かなコミュニティの創造～無縁社会から有縁社会への紡ぎなおし～（名古屋市営森の里荘：小池田忠さん）、④「三重紀南地域『すぎママの会』の活動」（障がいを持った子どもの母親たち：中島啓美さん）について語られました。話し手４人の方はこのパネルの世話人として参加しています。それぞれの地域課題と取り組んでいる様子を丁寧に話していただきました。

三重県名張市が創設した制度に基づく取り組みや、小牧市本庄での区長制度がある地域でのまちづくり活動、名古屋市緑区で自治会長として住民主体でコミュニティづくりに取り組んでいる話、障がいを持った子どもたちの成長と自立に対応できるよう地域での連携を結びながら支援体制づくりに取り組んでいる様子が語られました。

●志縁組織の視点から地域福祉を考える

２回目の座談会（８月３０日）「志縁組織の視点から地域福祉を考える」では、①社会的引きこもり支援の「ＮＰＯ法人仕事工房ポポロ」（豊田利幸さん）、②子育て支援の「社会福祉法人恵方の家」（内藤穂波

さん）③協同労働のワーカーズコープセンター事業団組合員（津坂賢一さん）、④有償のたすけあい活動「コープぎふ・くらしたすけあいの会」（伊藤佐記子さん）、４人の方（パネルの世話人）が話し手でした。

志縁組織というのは一定の課題を持って作られている組織で、ＮＰＯや社会福祉法人、ワーカーズなどが該当します。どんな課題にどのように対応しているか、日常的な活動の様子も語られ、それぞれの組織特性に注目しながら聞きました。この会では若手研究者や中国から日本の地域福祉を学んでいる留学生の参加があり、これまでなかった新しい視点が加わり広い視野で考えることができ、議論がふくらみました。

●生協の視点から地域福祉を考える

３回目の座談会は、生協にズームアップしました。生協組織自身の取り組みとして①「地域における支え合い事業－コープあいち・愛知県協働事業」（コープあいちコープ相談センター：河田悦夫さん）。これは、平成24年度コープあいちと愛知県の協働事業で、５つのモデル地域でNPO、協同組合、住民組織、行政などが協働して新しいネットワークの構築を目指すというものです。具体的には制度の谷間に置かれている人への支援、地域での顔の見える関係づくりや情報が共有しやすい仕組みづくりということです。直接活動に関わっている千種区本山地域の話では苦労も伴いながら理解し合う実感が伝えられました。②「瀬戸の福祉まちづくり」（生協とつながりを築いてきている、ＮＰＯ法人MtoM・窯の広場：服部悦子さん）、しなやかにつながっていく服部さんの話は聞き手を引き込み、後日窯の広場に足を運んで学んだ人もいました。③生活クラブ生協とつながりがあるNPO（多摩市）を調査対象にした報告「ローカルな市民活動を支える仕組み～担い手に着目して～」（名古屋大学研究員：前田洋介さん）ではキーワードとして「向いの隣人より遠くの隣人」、「選択縁（上野千鶴子氏提唱）」という言葉も紹介されました。また、④南医療生協が取り組んでいる「南医療生協の地域ささえあい事業」（地域支え合いセンター：土屋誠さん）では、主体的な組合員活動が事業経営にしっかりと結びついていて、悲惨な状況の地域住民を救出した実例をあげながらそこから医療生協としての関わり方を考えていく大変印象的な話がありました。

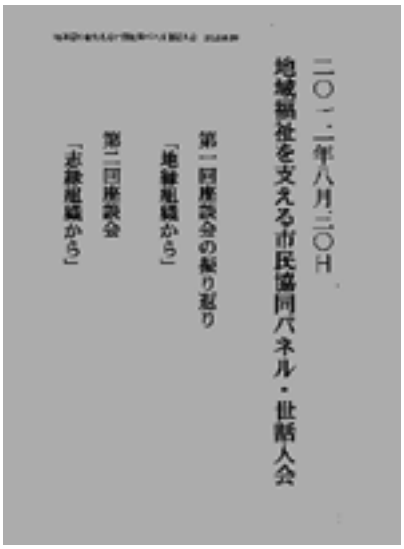
●生協職員として関わって

4回目は、コープぎふの職員（コープぎふエリアマネージャ：森　好浩さん）の地域での関わりについて報告を聞きました。岐阜市東部の高齢化した団地で孤立死が起きたことをきっかけに、地域住民が立ちあげた「安心して住み続けられるまちづくりの会」、主な会の活動は「虹の喫茶」ですが、この会へ生協職員は役員の立場で関わっています。

■座談会を開催し話合い考え合い、そして発信

実践に基づく話があり参加者で意見交流をしています。個別の事例を聞くだけに留まらないで、そこでの共通項や普遍性を持った価値など引き出していこうとしています。

ここでの話を世話人会の中だけで共有するのではなく、出来るだけ多くの人たちに聞いて欲しいということから、簡単なミニ冊子に仕立てて発行し始めました。本の体裁は質素ですが、伝えたい中身があります。自家印刷です。冊子が欲しい方は、事務局までお知らせください。



①「二〇一二年八月三〇日」、②「十月二十六日」、の二冊を発行しました。

第３回岐阜のつどい―岐阜を知ろう！つながろう！　報告　文責 事務局

「ぎふいび生活楽校へ行こう！」

生きる力を養う―中山間地での地域振興を学ぶ！！

岐阜を知ろう！つながろう！第3回岐阜のつどい―「ぎふいび生活楽校へ行こう」という企画を開催し、12月8日にラーニングアーバー横蔵・樹庵に岐阜地域懇談会で行ってきました。

平成15年より、横蔵小学校が閉校されるにあたり、「せっかくの文化施設、廃屋として朽ち果てさせず、文化の火を灯し続けられないだろうか・・。」としてスタート。今ではさまざまな団体とネットワークが広がり、生活楽校もさまざまな活動が行われています。レストラン、そば処、ホールなどがあり、生ハムづくりやそば打ち、草木染め体験教室なども行われています。訪問当日も大阪からこられた方たちを含め、ソフトボールの樹庵杯が行われ、教室を客室にした宿泊所は一杯でした。

【　当日のスケジュール　概要　】
午前１０時００分　樹庵（ラーニングバード横蔵）
10時～12時　小林さんより、施設案内　お話。
12時～14時　雪が降ってきて大変寒い中、
バーベキューを食べながら、
生活楽校の活動について　交流。
14時　帰路につく。

「NPO法人ぎふいび生活楽校」を立ち上げ、豊かな自主的活動を繰り広げ、中山間地の地域再生をはかる、事務局長の小林さんのお話をうかがうことが出来ました。また、都市と農村のネットワークを広げるためのさまざまな活動の様子や生き生きと暮しておられる、地域の方たちの取り組みの様子を見る事が出来ました。

＝小林正美さんより中山間地の地域再生のお話＝

◆　「泣いて帰るな」と送り出された村　◆

小林と申します。63歳、昭和24年1949年生まれ、団塊世代です。久瀬村というところで生まれました。同級生があの山奥の村で一学年72人いました。今、久瀬小学校、1学年4人、学校の存続をどうするかという減り方なんですね。過密で集中している東京や大阪の大都市、他方どんどん人口減少して過疎化していく地方という両方の矛盾をこの国は抱えているんじゃないかな。

私が15歳、大垣に下宿して高校へ行くときに、親父が言った言葉が今も忘れられないんです。「町に行けば文化があって、仕事もあって経済も豊かで、いいものはいっぱい町にある、泣いて帰るな。」その世代みんなが、そういう言葉に、送られて町に行ったんです。とにかく我慢して、歯食いしばって、町でがんばり続けて40年、50年、生きてる世代が団塊世代、だと思っています。私もそのうちの一人でした。

↑　あつく語られる　小林さん

弁護士を志して入った早稲田大学法学部時代、学生運動に携わるうち、新しい消費者運動に関心を持ち、生活協同組合の学生役員になった。54歳で早期退職し、現在はラーニングアーバー横蔵内で住み込みで働きながら、NPO活動や体験学習など幅広く参加している。（中日新聞での小林さんの紹介記事より）

◆　人口減少の時代に　◆

明治の初めのころ、1880年前後の日本の人口は6000万人といわれています。で、1990年、100年かけて1億2千300万人と、ほとんど倍になったわけです。日本の人口統計研究している機関の予測では、2100年ころの人口は6000万人になってしまうと、根拠のある数字を出しています。これと、日本の成長とは全く同じなんです。人口減少社会の中でどう日本が生きていけるのか、について、人口論の切り口からもっと真面目に考えなきゃいかんと思います。

「会社の寿命」という本があります、明治から100年間の日本の上位100社毎年業績調べたもの、そこの統計でいくと会社の寿命はせいぜい40年から50年。個人の人間の寿命もこうですよね。

お母さんの胎内から、「おぎゃー」って泣いて誕生してくるわけです。で、いろんな人生があって最後は、何らかの痛みを持って泣いて死んでいく。これは避けられない宿命ですよね。せめて生きている間は笑って過ごしたい。そして人生としてのピークは40プラスマイナスアルファのところ。

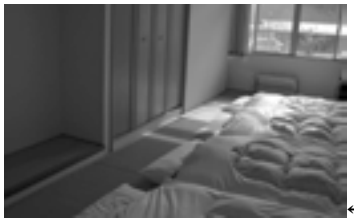
◆　生活楽校をつくったわけ　◆

私は54歳で、大学生協35年やっていたんですが、全部退任させてもらって、Uーターンでこっちに戻ってきました。なんでUターンしてわざわざこんな山奥にもどってくるのか？不思議がられます。

私は22歳で結婚して、24歳で長男が生まれて、その長男が22歳で結婚して24歳で子どもが授かりました。48歳で孫ができたときに、自分の子育ての責任はもう終わった、私は自分のやりたいことに自分の人生をかけてみたいと思ったんですよね。たどり着いたのが生活の学校をやりたいということでした。大学生の後ろ姿を35年間、見てきたからです。

今は子どもたちが非常に大切にされて過保護だから、生きる力・生活力が非常に萎えています。大学生になっても洗濯機を自分で動かして洗濯したことがない、ご飯も炊けない、包丁が使えない。コミュニケーションできない、会話が出来ない。ちょっと壁にぶち当たるとうわーっと泣いちゃう。もちろん半分くらいの子はしっかりしていますけれども、半分くらいの子は社会の流れから外れて、これでいいのかと言いたくなるような状況に置かれています。やはり親の育て方が間違っているんですね。自立して、生きる力を持った子供たちを育てないとだめです。義務教育の世界は任せますけど、義務教育には限界があります。社会の中、地域の中、みんなの中で、いろんな体験をして生きる力を養っていく、免疫をつくっていくことが今、大事だと思います。日本中にそういう受け皿を作ればいい。私が子供の頃、生きる力を教えてくれたのは年上の先輩たちなんです。

自分の人生、いずれはピーク超えます。でも自分の体力、気力が下り坂になる時期にどこで何をやっていたら私はハッピーなんだろうか？考えてそれで生活楽校をやりたいって決めて、10年間かけて、ラーニングアーバー横蔵　樹庵という組織を作ってきたわけです。60過ぎてからでは遅すぎると思ったわけです。やはり気力、体力が充実しているときにトライしたいと思いました。それから、40代、50代の主婦の人、60代以降のハッピイリタイア組、そういう人たちの新しい生きる場所、働き場所にしたいと思い、樹庵でいろんな小屋を建てて、お店を出しています。テナントとして貸して、売り上げの20%を納めていただいていますが、元高校の体育の先生がそば打ちをしています。アマチュアだけど、5年、10年やって立派なものでおいしいです。おいしいと言ってくれるのが張り合い。収入は昔みたいには取れませんけどね。お小遣いとして5万、10万の収入も得られます。60代7



←教室だった客室

理科室が浴室→

←体育館

0代で何かやりたいと言う人を引っ張り込み、小さな産業を興したいと思ってきました。

◆　元気をつくっていくために　◆

先を見ると人口減少という状態です。何にもしないで去年と同じことをしていたのでは、毎年マイナス1％減少していきます。新しい努力をしてゼロにするか、もっと努力をしてプラス1％に持っていくのか、今までの時代とは違った苦労が求められる時代ですよね。 だから今日本がいる位置も、私が今人生としている位置も、同じ位置にいるんで、ここからどういう元気をつくっていくかを、個人も自治体も国も考えなきゃいけないと思います。

田舎で暮らせば金がかからない。あるもので十分、野菜やら何やらは隣近所の婆さんたちが、玄関に置いて帰っていくのでね。私ももらったものを「お互い様」と言って暮らしていけば、3万5千円で一月暮らせます。田舎暮らしは貧しいなんて思ってもらったら大間違い。田舎暮らしは結構リッチ、豊かです。それは事実です。

これから、こういう村をなんとか元気にしたいと思います。自然がいい、空気がいい、景色がいい、水がきれい、お金はかからないし、仕事をしていても楽しい。これからの過疎地域は、もっと空き家、廃屋、使われなくなった公民館などいろんな建物を有効活用してリユースして、新しい産業と文化とネットワークを作っていくことが必要です。

私の田舎の下の谷から流れている水なんてものすごい綺麗ですよ。充分飲料水として使えるものがあると思う。山と自然を活用して何かを興していく、もっと促進する法律こそが必要です。国有林、県有林を囲ってしまうと一般の人は入れない。何にも出来ない。どんどん廃れていく。思わぬ悪循環です。活用して使ってこそ最高。

不在地主がこの辺の山の共有林以外の民有林の60％を所有しています。手入れしてない人工林、実がならないから餌が無くて、狸も狐も鹿も猪も里に降りてくるんです。本当に山をやりたいという森林ボランティアが一杯いますよ。やる気のある真面目な森林所有者を育てていかないとだめだ、今その発想の転換をしていかないと山はどんどん荒れていきます。

↑生ハムづくりの方より

樹木葬が、団塊世代を中心に話題になっています。自分が眠りたい場所を自分で決めて生前予約しておく。お寺を地域のコミュニティセンターの再生として、もう一度よみがえらせなきゃいけないと思っているので、お寺の存続にも役立ちます。お寺のお坊さんと村の人たちが、墓地公園みたいにして、そこを綺麗に芝生を張って手入れしてもらう。管理運営して村人の仕事にもなるわけです。そして都会の人が半分旅行もかねてお墓参りもする。こんな風に過疎地域の活性化策、元気になる方法をやっていけば、中山間地だっていろんな可能性がある。こんなことを生活楽校の会員と役員とその他のNPO団体と話しています。

10年先50年先どうなるか･･･危機感を持つ、持ったら共有化してこうならないために、こうなるにはどうするのか、国に対して自治体に対して、してくれないって言っていたってもうあかん。自分たちが何をやるか、自分と自分たちで自立と協同、を育てていかないと。

協同とか自立とか、そういう世界が大変求められています。

← ホ ー ル ①

↑レストラン樹庵
（そば処樹庵もあります。HPより）

↑バーベキューサイト
（50名まで　HP より）
http://www.juann.jp/　ぜひご参照ください。

《共同購入事業マイスターコース　第３期生実践交流会》開催　　文責／事務局

『もの、くらしを伝える役割がある！』

―「しっかりと核を持って歩んでいきたい」「マイスターとして恥じない生協人生を」―

共同購入事業マイスターコース第3期生実践交流会が、2013年1月13日、豊田市枡塚西町の味噌でお馴染みの「野田味噌商店」で開催されました。参加者は第3期生と企画委員の20数名でした。「マイスターコース受講後の1年を振り返って実践交流」をテーマに、野田社長から味噌についてのあついお話、味噌蔵と工場の見学、五平餅づくり、グループワーク「悩みを出し合い、グループで答える」などを行い、中身の濃い交流会となりました。

《野田味噌商店　野田清衛さんからのお話》より

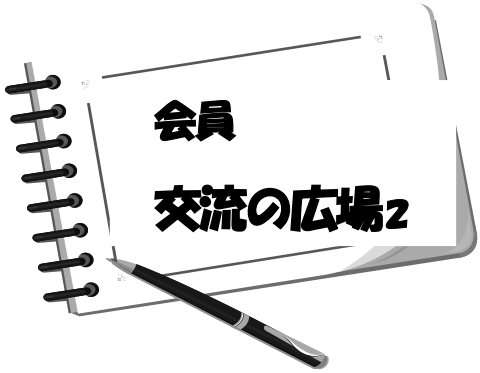
「変わるものと変わらないものを意識してほしい。組織の中で変わってはいけないものは何なのかということが自分の心の中にカチッとあれば、後はどんなに変わっても良くなる。組合員の暮らしを守っている、サポートしているという自負を持ってほしい。組合員のことを思うこと。それが生協の本質だと、先輩が教えてくれました。」「味噌はいろいろあるが、豆味噌はこの地方だけです。豆味噌は、非常に個性のある、東海の味、名古屋の味です。これがベースになっているのが通称名古屋飯です。我々の地域を表現するのに非常に有効です。先輩たちが組合員に伝えて、食文化を大切にして意識してきた。名古屋飯を作ったのは実は生協だといいたい。生協が力を出してきた。そこで変わっていいことと変わっていけないこと、それをしっかりつかみたいです。」　「何でこれを売っているのか、絶対理由があります。対組合員との関係です。そこをはずすとなんでも良くなってしまう。みなさんがたは、ものを伝える生協の担当です。ものを売るのでなく、ものを伝える、くらしを伝える、というのが生協の一番の役割だった。将来に向かって、生協のあるべき姿をちんとおさえていってほしい、がんばっていってほしいと思います。」

「味噌蔵の見学」でのお話より
「味噌は作るのでなく育てる、　風味豊かにする」「速醸法でなく、天然醸造」「金属タンクは木桶に及ばない、木桶にこだわる」「蔵によって匂いが違う。戦時中、格納庫に使われた蔵もある」「木桶を作って、一町歩の山がその裏にある事が分かる」「生協は、もの、くらし、ことを伝えよう！くらしを伝える役割がある」

《第３期生　参加者の感想》　より

- ◆ 工場見学に、五平餅作りと、久々にワクワクしながら、また、楽しみながら参加できました。改めて味噌育成の奥深さ、歴史を学ぶ事ができ、今後の組合員さんとの関わりに役立てたい。
- ◆ 野田社長の「ものづくり」「ひとづくり」に対しての熱い想いを伺い、“変わるものと変わらないもの、変わって良いものと変わってはいけないもの”それを自分自身で常に確認しながら前進してゆく事が一番大切なのだと教えられました。お話の「人」としては自分のこれからの生き方で伝えていけたらと思いました。
- ◆ 歴史ある蔵や味噌樽を間近に見ることができ、日本の文化や技術は素晴らしい。世の中の風潮に流されず、しっかりと核を持ってこれからの人生を歩んでいきたいと思います。

- ◆ 一年間自分なりにマイスターに対してしっかりと考える時間だったが、あらためて交流すると気持ちが新しくなりました。一人だと考え方がかたよってしまうのでとてもいい機会でした。
- ◆ マイスター修了して1年、自分自身も大きく変わる事が出来ました。でも、最近は自分が大事にしている「芯」がブレているのでは？そんな思いを熱い思いと思いやりのある言葉、想像力を広げていただける言葉に触れ、何をなすべきで、何を考えていくのかが明確になりました。自分の中では「覚悟」と「思いやり」と言う2つの言葉を大切にしてマイスターとして恥じない生協人生を歩んで行きます。
- ◆ みなさん、マイスター研修で学んだ事を大切にして日々活動されているようでした。自分に何ができるのか？と考える事もでき、交流ができあらためて考えさせられました。
- ◆ 本当に終了なのかと寂しいです。もっと話を聞かせていただきたいし、討論できたらなあと思います。



○近藤育子さん（コープあいち組合員）より

今年は、ちょっと違った新年を迎え、心新たにしています。地域と協同の研究センターの皆様方と共に、私のような者にも勉強をさせていただく機会を得ました事、この上ない喜びです。又、東海交流フォーラム実行委員のメンバーとしても、楽しく参加させていただいています。

先月のこと、一通の封筒が届きました。「どなたかな？」と思い封を開けましたところ、東北地方（被災地の大船渡・陸前高田）から、その後の様子を知らせるお便りでした。「がんばっぺし。東北皆で手芸講座を開きながら、仮設住宅の方々との交流を深めながら、陸前高田にも、昨年末から仮設の集会所が出来、それを機会に手芸講座を開けるようになりました。切り絵講座には、男性の方々の参加もあり、その輪が広がっています。」とありました。被災地の方々が一生懸命頑張っておられる写真も添えられていました。「まだまだ災害復興住宅の建設が進まずに不安な日々が続いています。」と、不安な気持ちもつづられていました。

今、私達が引き続き支援をさせていただくこと、「いつまでも忘れない、あなたたちのこと。いつまでも一緒ですよ。」とのメッセージを送り続けることが大切だと思っています。ひな祭りのカードも家族みんなで協力して作りました。

被災地の皆様が作ってくださった手芸品や、東北地方の商品の呼び掛けを多くの方々と一緒に活動して、被災地の方々のお心に寄り添って参りたいと思います。

被災地は寒い冬を不変えておられますが、皆様が一針一針一生懸命縫っておられる姿を思い浮かべながら、私もいろんな場所で活動して行きたいと思っています。

雪が溶け、もうすぐ春がやってきます。ご一緒に頑張って参りましょう。

近藤育子さんの作品

○溝口弘子さん（東日本支援グループ本山ＡＩＢ会）より

本山では阪神大震災直後、「がんばれ神戸チャリティコンサート実行委員会」を立ち上げ、1ヶ月後には、プロの音楽家の方々の支援も受けて、5時間に亘るコンサートを生協会館４階ホールで開き、50 万円近くを神戸に送ったのを皮切りに、一か月に一回はコンサートなどイベントを開き、支援金を送り続けた経験をもちます。それらの義援金は、神戸の「レインボウハウス」となって、家族を失った子たちの、心を癒す場として大きな役割をはたしております。今、そこに通い、心を癒され、仲間を作った子ども達が東日本の震災支援には大きな力となっていると聞いております。

さて、３・１１が起きてすぐに本山では「東日本大震災支援・本山」を２０いくつのグループ、個人で立ち上げ、４月２９日に大バザーを開催しました。収益はコープあいちを通して被災地におくりました。それらが一段落した後、今度は大きな組織ではなく、身近なところで、できることをしていこうと、実行委員会を解散しました。

その後いくつかの支援グループが立ち上がり、それぞれの想いをそれぞれの形にした活動を始めています。

私たちは、２０１１年秋、「アジアの食のつどい」を共催した３グループが『本山ＡＩＢ会』を立ち上げ、支援バザーを続けております。Ａは「アジアボランティアネットワーク東海」、Ｉは「生きがいコープ東海」、Ｂは「ザ・文化」の略です。

まだまだ被災地の復興がめどが立たない状況の中、メンバーで話し合っていくうち、東北地方にあの神戸の「レインボウハウス」の建設が計画されていることを知りました。

被災した子供たちの「心のケア」が早急に必要ではと、その建設基金として支援金を送ることに決めました。メンバーの何人かが神戸に見学に行った際、思いきり思いをぶっつけるサンドバッグのある部屋、静かに自分をみつめることのできる瞑想の部屋など等、とても行き届いており、感激して帰ってきた記憶があります。

「レインボウハウス」が完成し、子どもたちの安らげる‘居場所’が出来る日を楽しみに、毎月のバザーで得るほんとうにささやかなお金ですが、3万円たまるごとに送金することにしております。

ＩＮＤＥＸ

巻頭エッセイ　東日本大震災から2年　栗田暢之　1
2012地域福祉を支える市民協同パネルとは・・　2-3
第3回岐阜のつどい報告　ぎふいび生活楽校へ行こう　4-6
共同購入事業マイスターコース第3期生実践交流会　7
会員交流の広場　2　8

2013年2月25日（偶数月25日発行）
定価200円
（税・送料込み。年会費には購読料が含まれています）
発行　特定非営利活動法人地域と協同の研究センター
代表理事　川 崎 直 巳
〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1－39
TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315
E-mail　AEL03416@nifty.com
HP　http://www.tiiki-kyodo.net/